

【研究ノート】

即興型英語ディベートでのジャッジ間の評価の違い：  
高校生全国大会決勝の事例分析から

小林 良裕

(豊島岡女子学園中学高等学校 / 東京学芸大学)

**Differences in Adjudication Results in Parliamentary Debate:  
Case Studies of High School National Finals**

KOBAYASHI Yoshihiro

(Toshimagaoka Joshi Gakuen Junior & Senior High School /  
Tokyo Gakugei University)

This case study examined how experienced adjudicators make decisions in parliamentary debate, focusing on what characteristics their decisions and scoring have and how their decisions differ among them. This study analyzed judges' decisions and scoring of two separate debate rounds (the final rounds of two national high school tournaments in Japan), adjudicated by 19 judges and 11 judges, respectively. As a result, it was suggested the individual speakers' scores could be better understood as performance-ranking in the particular round, and judges differed in their decisions in respect to their interpretation of 1) how practical arguments and principle arguments related to each other, and 2) what burden of proof was imposed by the debate motion at hand. Some limitations and the outlook for future research, along with this study's implications for practitioners were discussed at the end of this paper.

キーワード: 即興型英語ディベート、審査員教育、高校生大会

Key words: Parliamentary Debate, Debate judge education, High school tournament

*Debate and Argumentation Education - The Journal of the International Society for Teaching Debate* 2021, Vol.3, pp. 35-50

## 1. はじめに

過去 10 年ほどで、日本の中学・高等学校の現場では、英語ディベート指導の取り組みが幅広く見られるようになった。2000 年代半ばに、文部科学省の実施した SELHi 事業を 1 つの契機として、英語ディベート活動の中等教育での実践が報告されている（飛騨学園高山西高校 2006; 宮城県立都城西高等学校 2008）。また指導者向けの教材も複数、公開された（Hansen 2007; 久保 2009; 小林 2019）。

実践の場のみならず、実証研究の場においても、主にディベート的活動によるアウトプット能力の伸長、また学習者の意識態度、思考力の変化を測定する研究が行われている（有嶋 2010; 高畑・清水 2017; 中野 2007）。

また近年ではこれまで日本で一般的であったいわゆる「準備型」に対して、2000 年代以降日本の中高でも「即興型」ディベートの認知が広がり（松本 2009; 井上 2011）、英語のみならず日本語でも取り組みが進んでいる（加藤 2020; 小林 2021）。

このような現状を踏まえ、英語ディベートに関する今後の研究課題としては、発話能力の伸びといった産出能力に加えて、いかに相手の話を聞き、応対する能力を伸ばすかの調査が挙げられる。意見を分かりやすく伝える能力向上の次の段階として、当然学習者は他の者の発言を聞き、評価・理解して、議論を発展させる能力を伸ばすことが望まれる。

この指導を行うには、まず相手の話を聞き、評価する能力はどう伸び、またどう伸ばすことが出来るのか探り、そしてそもそも具体的に何を出来るようにすることが指導のゴールなのか明らかにする必要がある。

相手の議論を聞くこと、そしてディベートの試合を評価する能力についての研究は、より実践的な理由からも望まれる。自分の意見を英語で述べる活動は、中学と高校でより一般的に取り入れられるようになっている（小林 2020）。授業内で生徒同士が試合を行い、また審判を務める機会が増えている。この点から、生徒へのジャッジ指導の必要性が高まりつつある。

また別の理由としては、中学・高校の部活動での英語ディベート大会が増えつつあり、現在までに全国規模の大会が 3 つ毎年開催されるに至っている。そんな中、採点競技の宿命として、そもそも大会におけるジャッジングは一貫しているのか、ジャッジごとに勝敗の判断が異なっているのはいか、という点についての疑問が選手の口にも上る場合もある。部活動のコーチにとっても、どのようにジャッジが勝敗の判断をしているか知ることは、指導上の価値がある。

## 2. 先行研究

日本における即興型ディベートに関する研究は、その嚆矢を Inoue & Nakano (2006) に求めることができる。大まかに「NDT スタイル」と論文内では呼称される準備型英語ディベートと、即興型英語ディベートに取り組む大学生に対して質問紙による調査が行われ、両者の回答が比較された。調査結果の 1 つとして、英語能力とスピーキング・コミュニケーション能力に関して、即興型に取り組む学生の方が、準備型に取り組む学生よりディベートを通して向上したと感じていることが報告されている。

続く研究として、久保(2019)は英語ディベートに大学の部活動として取り組む学生は、その教育的効果として英語能力の向上に期待が大きく、ディベート教育自体としての即興型と調査型の効果を比

較検討する上では調査対象として偏りがあると指摘した。その上で、日本の大学において授業内で即興型と調査型の双方を学生に日本語で経験させた上で、Inoue & Nakano (2006)と同様に質問紙による調査を行った。その結果、即興型においてはその場で考える能力が身についたと回答した学生が多く、対して調査型は特に、分析力に関して効果があったと感じていることが示された。また、法学部のゼミとして実施した大学と、一般教養科目として実施した大学での回答結果を比較し、両者の差異を踏まえ種類の異なるディベート形式の教育現場での使い分けを提言した。

この久保(2019)において、試合の判定に関して「即興では論理性よりも印象的な事例の方に説得力を感じたからといった投票行動が見られる事が多い印象があった」という言及があり、例として一般教養科目として実施した大学での「結婚においてお金は愛よりも重要である」という価値論題での学生の勝敗判断を挙げている(p.16)。この即興型ディベートでの事例の扱いに関しては、中川・山内・新谷 (2019)からも示唆を得ることが出来る。英語即興型の高校生大会における上位チーム同士の試合と、下位チーム間での試合の談話分析が行われ、両者が比較された。その結果、下位チーム間の試合では自分自身の経験といった事例の説明と、相手チームの選手が話した内容の確認にスピーチ内容がより多くの割合で使われていると示された。対して上位チームでは、相手への反論により多くスピーチ時間を割いている可能性が示唆された。

このように、即興型ディベートにおいては久保(2019)における日本語即興型の初級者、また中川・山内・新谷(2019)での英語即興型高校生大会での下位チーム同士の試合内容から示されるように、具体例あるいは聴衆の感情に訴えるエピソードが試合内容、そして試合の勝敗の判断に大きな役割を果たしていると推察が出来る。また逆に、上級者同士であればその重要性が相対的に下がるのではと予想される。

上級者同士の試合において、複数ジャッジ間の評価・判断がどう異なり得るのか示唆を与える研究として、Inoue (1994)と Corbit (2017)を挙げる事が出来る。1990年代初頭の調査型英語ディベートに取り組む日本人大学生をエスノグラフィーの手法を用いて調査した Inoue(1994)では、一章を用いて、ある調査型大会の決勝におけるジャッジの試合の解釈の違いを多面的に説明している。その1992年に山口大学で行われた姫山杯の決勝では、5人のジャッジの全員が否定側に投票したが、試合内で論じられた論題充当性(topicality)についてジャッジ間の認識が異なっていた。この判断の違いがどう生じたのか、各ジャッジの勝敗理由の記述内容、フローシート、そしてジャッジング・フィロソフィーを子細に検討することで説明が試みられた。

Corbit(2017)においては、7対4に勝敗の判断が分かれ、またその議論内容から一般のメディアからも注目を集めたという2014年のアメリカのCEDA National Championship 決勝の事例分析が行われた。この調査では、試合が勝利のための駆け引き(gamesmanship)に終始している問題が指摘され、その原因の一端がこの駆け引きをジャッジが肯定している点にあると論じられている。この結論は、事前に提出されたジャッジング・フィロソフィーから、各審判がどのようなジャッジの枠組みを用いて勝敗を判断したのかの分析に基づいている。

これら2つの事例研究からは、ジャッジが記入したフローシートや勝敗の理由書などを分析することで、ジャッジの判断が分かれた場合の原因について、示唆を得ることが可能であると分かる。即興型ディベートではジャッジング・フィロソフィーを大会で提出するという慣習はないものの、勝敗の理由書、また事前・事後のインタビューを通じて各ジャッジがどのような枠組みで試合評価を行って

いるのか探ることは可能であろう。

以上を踏まえ、本研究<sup>1</sup>では以下の2点をリサーチ・クエスチョンとして設定した。

- (1) 即興型英語ディベート高校生全国大会のジャッジ間では、試合の評価・判断がどれだけ異なるのか（個人得点、勝敗の判断、具体例の扱いに関して）。
- (2) 同上のジャッジ間の評価・勝敗の判断の違いの原因は、勝敗の理由書の記述からどのように読み取れるのか。

### 3. 方法

#### 3.1 調査対象

研究対象は、2018年度と2017年度の一般社団法人日本高校生パラメンタリーディベート連盟(HPDU)主催の即興型英語ディベートの全国大会決勝戦である。試合形式は、3人制の英語ディベート高校生世界大会(World Schools Debating Championships)のそれをベースにした即興型の試合である。調査開始時点では2018年の大会が最新であったこと、またそれぞれ試合動画がYouTube上で一般公開されており、ジャッジの審査結果の資料も完全に揃っているため、この2試合が研究対象に選ばれた。

試合の審査においては奇数のジャッジがお互いに相談することなく、個別に勝敗と各スピーカーの個人得点を与え、勝敗の理由を英語または日本語でA4用紙1枚に記入した。記入は試合終了後、15分から60分程度で手書きにて行われた。

個人得点の付け方については、国内外の大学生大会で標準になっている、75を標準とした総合的評価(holistic rating)を用いている(English Speaking Union of Japan 2017)。細かい評価項目それぞれで採点し、最後に各スコアを合算する分析的評価(analytic rating)で個人得点を与えることは、即興型英語ディベートの大会ではまれである。一般的には、75を標準として上下12点程度の幅で、大まかな目安を参照して各選手に点数が与えられている。勝敗の理由書と各ジャッジが与えた個人得点は、複製された用紙が選手に配布される。

表 1: 調査対象の試合の概要

	ジャッジ数	試合結果	論題の種類	論題
2018年度	19名	肯定側 3票 否定側 16票	政策	This House would criminalize the paying of ransom. (本院は身代金の支払いを犯罪とする)
2017年度	11名	肯定側 5票 否定側 6票	比較・価値	This House prefers a world without marriage. (本院は結婚という制度のない世界をより好む)

各試合の概要をまとめたのが表1である。大会の論題に関して、2018年度決勝は一般に政策論題に分類され、また2017年度決勝は大まかに比較・価値論題に分類される。

<sup>1</sup> 本論文は第6回ディベート教育国際研究会大会での口頭発表、また第6回東京議論学国際学術会議での口頭発表に基づいている。

本大会でのジャッジの選出は、大会運営者による招待制となっている。大まかに言えば3年以上継続して即興型英語ディベートの活動に取り組み、国内外の大会で選手としてまたジャッジとして結果を残した大学生そして社会人が招かれている。ジャッジ全員が日本語を母語としていた。

本研究では事例研究として、実際の大会での状況を把握することに重きを置いている。試合が行われてから年月が経過しており、当時のジャッジ個々人の詳細なディベート経験といった属性を踏まえての分析まで至っていない点を、本研究の限界として明記しておく。以下の分析方法に記載の通り、本研究ではジャッジが選手に与えた個人得点の傾向と、記入した勝敗の理由書から読み取れる特徴に焦点を当てる。

### 3.2 分析方法

#### (1) 個人得点

個人得点においては、勝敗が異なったジャッジ間での点数の付け方の違いに留意して、記述統計レベルでの大まかな特徴を読み取った。また、立論スピーチ(constructive speech)に対して、総括スピーチ(reply speech)はスピーチの役割が異なり、与えられる個人得点は立論スピーチを半分にした値で評価されるため、今回の分析からは除外した。

#### (2) 勝敗の理由書

ジャッジが記入した勝敗の理由書、2018年度(19枚)と2017年度(11枚)に対して、以下の項目に注目して特徴を読み取った。

- a. 勝敗を決めるに当たって、どのような観点からジャッジは試合を整理しているか。
- b. 勝敗を決めた根拠は何であるのか。
- c. 勝敗が同じであったジャッジの理由書で共通している点、異なったジャッジ間での差異は何か。

#### (3) 両試合の分析結果の比較

分析作業においては、勝敗の理由書・個人得点共に、まず調査開始時点で最新の2018年度の結果から分析を行い、次に遡って2017年度の結果を調査した。加えて、両試合では用いられた論題の種類が異なる点に留意して比較を行った。

即興型英語ディベートでは、政策論題以外に、事実の認定に関する論題(例えば「スマートフォンは子どもにとって益よりも害をなす」)、また価値論題(「インターネットが人類史上最も重要な発明だ」など)が用いられる。論題の種類の違いによって、一般に各チームの立証責任は異なるため、勝敗の判定において何らかの違いを生んでいると予想される。

今回の事例研究は、今後の実験的手法を用いた調査の前段階として、既存のデータの大まかな傾向を探ることにある。分析の検証に当たっては、本研究の研究者が特徴を読み取り、両大会で主審判を務めた者がその解釈の適切さを確認した。並行して質問紙調査を実施するなど、質的研究で期待されるトライアングレーションによる妥当性の検証を経ないことを、本研究の大きな限界・問題として明記しておく。

## 4. 結果

### 4.1 個人得点 (2018年決勝)

決勝と予選における点数の記述統計は、表2の通りである。予選の各試合ではジャッジ1名が勝敗

を決め、個人得点を与えている。

表 2: 個人得点の記述統計

試合	平均	標準偏差	幅
2018 年決勝 (N=114)	77.9	1.58	6
2018 年予選 (N=480)	76.1	2.23	12
2017 年決勝 (N=66)	78.1	1.84	9

注: Nは選手の数にジャッジ数で乗じた値

2018 年決勝では同一の選手に対して、19 人のジャッジが 74 点から 83 点までの点数を与えていた。以下の 19 名のジャッジのうち、J1~J16 のジャッジは否定側を勝利とし、J17~J19 の 3 名のジャッジは肯定側に票を投じた。

表 3: 各ジャッジが同一選手に与えた個人得点(2018 年決勝)

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12	J13	J14	J15	J16	J17	J18	J19
肯定 1 人目	80	77	77	78	77	78	76	77	79	81	79	79	77	78	78	76	78	77	81
肯定 2 人目	80	76	77	78	76	76	76	77	78	81	76	79	79	77	77	76	81	77	80
肯定 3 人目	81	76	77	77	77	76	74	77	78	81	76	79	77	78	77	79	80	76	78
否定 1 人目	80	77	77	77	76	77	77	77	79	81	78	79	78	77	77	79	79	76	78
否定 2 人目	81	79	78	79	78	80	79	78	81	82	79	81	80	80	80	77	80	76	79
否定 3 人目	81	78	77	78	77	81	78	78	83	82	78	80	78	81	78	80	79	76	78

注: 個人得点は 75 が標準

この個人得点を、1 試合に参加する 6 名内での順位に変換した場合(一番点数が良かった選手を 1、最も低い点を得た選手を 6 とした)、ジャッジ間で肯定側 2 人目と否定側 2 人目の順位に関して、一定の傾向が見られた。その 2 名の選手の得点を順位に置き換えたものが表 4 になる。

表 4: 個人得点による順位 (2018 年決勝 肯定側 2 人目・否定側 2 人目)

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12	J13	J14	J15	J16	J17	J18	J19
肯定 2 人目	4	5	2	2	5	5	4	3	5	3	5	3	2	5	4	5	1	1	2
否定 2 人目	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	4	2	3	3

注: 数字は順位を表す(1 が最高、6 が最低)

否定側を勝ちとしたジャッジ(J1~J16)は、J16 を除き、否定側 2 人目に 1 位または 2 位の順位となる点数を与えていた。さらには、これら否定側を勝利としたジャッジは全員、否定側 2 人目を肯定側 2 人目よりも高く評価している。その一方で、肯定側を勝利とした 3 名のジャッジ(J17~J19)は、否定

側 2 人目よりも肯定側 2 人目をより優れていたと判断している。数値を順位に変換することで、以上の傾向が読み取れた。

#### 4.2 個人得点 (2017 年決勝)

2018 年の決勝での分析結果からは、素点からは見えない傾向が、得点の順位から窺えることが示された。これを受け、2017 年の決勝でジャッジが与えた各選手の個人得点(表 5)を、順位化したものが表 6 になる。この試合では、J1～J5 のジャッジが肯定側を、J6 以降のジャッジが否定側の勝利と判断した。大まかな傾向としては、肯定側 1 番目と否定側 1 番目が高い評価を得ている。また、否定側に投票したジャッジは、肯定側の 2 人目に低い評価を与えていること、そして否定側の 3 人目を高く評価している傾向が読み取れる。

表 5 : 各ジャッジが同一選手に与えた個人得点 (2017 年決勝)

選手	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11
肯定 1 人目	79	80	77	81	80	79	79	79	79	79	79
肯定 2 人目	78	78	76	78	76	77	78	75	77	75	77
肯定 3 人目	77	77	76	81	77	78	79	75	77	75	78
否定 1 人目	78	80	78	78	77	80	80	79	80	80	79
否定 2 人目	77	77	76	77	77	77	79	76	76	77	77
否定 3 人目	78	77	75	80	76	79	81	79	79	76	78

表 6 : 個人得点による順位 (2017 年決勝)

選手	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11
肯定 1 人目	1	1	2	1	1	2	3	1	2	2	1
肯定 2 人目	2	3	3	4	5	5	6	5	4	5	5
肯定 3 人目	5	4	3	1	2	4	3	5	4	5	3
否定 1 人目	2	1	1	4	2	1	2	1	1	1	1
否定 2 人目	5	4	3	6	2	5	3	4	6	3	5
否定 3 人目	2	4	6	3	5	2	1	1	2	4	3

注: 数字は順位を表す(同点の場合は同順位で、1 が最高、6 が最低)

#### 4.3 勝敗の理由書(2018 年決勝・政策論題)

2018 年の決勝では、“This House would criminalize the paying of ransom (本院は身代金の支払いを犯罪とする)” という政策論題が用いられた。勝敗の理由書でジャッジが言及した内容を踏まえると、肯定側と否定側の主な議論内容は、表 7 の通りに要約することができる。

勝敗の理由書の分析結果からは、主に 3 つの特徴が見られた。まず、試合内容の評価の観点がジャッジで共有されていた。ジャッジの理由書内では、それぞれ調査型ディベートでの基本的な議論の型となる、政策のメリット・デメリットについての言及があった。そして同様に、「何が政府の役割とし

て優先されるべきか」や「ある行為を犯罪と見なす要件は何か」といった、論題と関連する原理・原則についての説明について、19人全員の理由書では触れられていた。

これら選手が呼ぶところの「プラクティカルな議論 (practical argument)」と、原理・原則に関する議論(principle argument)は、政策論題の試合で議論されると一般的に期待される内容であり、従って勝敗を判断する観点としてジャッジも採用したと考えられる。

2つ目の特徴として、勝敗の判断が異なったジャッジ間での理由書を比較した場合、肯定側②の議論と否定側②の議論の評価において、差が見られた。肯定側に投票した3名のジャッジはそれぞれ、原理・原則を中心とした肯定側②の議論をある程度受け入れていた一方で、その否定側②の議論については低い評価を与えていた。他方、否定側を勝ちとしたジャッジは基本的に否定側②の議論を高く評価していた。それら議論は、主に各チームの2人目が担当しており、この点上述の個人得点での評価のずれに対応していると言える。

表 7：試合内の議論の概要 (2018 年決勝)

議論	内容
肯定側・議論①	身代金の受け取りにより、非合法的な組織がさらなる活動資金を得て、その結果将来にわたって多くの人の安全・生命が脅かされる。
肯定側・議論②	もし仮に、相手チームの議論が成り立つとしても、現実に誘拐されて命を脅かされている人より、将来安全・生命を脅かされる人を守ることが、政府の責任として優先される。
否定側・議論①	身代金を支払うことで、誘拐犯から助けることができる命の数は多い。
否定側・議論②	もし仮に、相手チームの議論が成り立つとしても、現実に誘拐されている被害者を助けることは、将来脅かされる人々の安全よりも優先されるべきだ。

また上述のメリット・デメリットを中心とした議論と、原理・原則を中心とした議論の両者の関係の解釈に違いが見られた。大まかには、両者の議論は独立したもので、それぞれ単独で評価していたジャッジが多数であったのに対し、一方が成立するためには前提として他方の議論が成り立っていることを求めているジャッジが1名、その成立を理由書で言及していたジャッジが1名、それぞれ肯定側を勝利としたジャッジに含まれていた。否定側を勝ちとした理由書では、両者の関係性について言及しているものは見られなかった。

肯定側を勝ちとしたジャッジのうち1名は、理由書の抜粋である Sample 1 で示されるように、具体的なメリット・デメリットに関する否定側・議論①が成り立っていないため、それに従属するものとして(“is contingent upon”)原理・原則に属する内容の否定側・議論②を退けている。

同じく肯定側を勝ちとした別のジャッジは、否定側の2つの議論の不十分な点を指摘した上で、理由書の抜粋 Sample 2 に見られるように、肯定側において議論②の上に議論①が成立していることを評価していた。

**Sample 1 (肯定側を勝利とした理由書)**

The below is the conclusion that I reached after the round.

- If no one makes payment, criminal organizations are demotivated to conduct kidnapping

thereby the number of hostage-taking will decrease.

- Likelihood of saving current victims seems equal under both worlds and possibility of escalation exists in both world thereby can't see any difference on this issue.
- Principle that opp explained is contingent upon its execution / practical consequence, so I can't give credit to opp as long as practical issues were taken by Gov.

Many arguments were irrelevant to the motion. This debate is not "This House would criminalize hostage-taking" nor is this about "This House would negotiate with terrorists".

### Sample 2(肯定側を勝利とした理由書)

一方 Gov は、この payment という行為が financial support になってしまいより将来の被害者の数に大きく悪影響を及ぼすという立論の上で数の多い将来性のある程度優先すべきという立論と比較があったと思われる。

対して、否定側を勝ちとした 16 名による理由書を確認したところ、上述の通りメリット・デメリットを中心とした議論と、原理・原則を中心とした議論の両者の関係に明示的に言及している箇所は見られなかった。否定側を勝利としたジャッジの全員が否定側・議論②のある程度の成立を認めた一方で、否定側・議論①をある程度認めるか、あるいは対応する肯定側・議論②と大差がないとしていた。例として、勝敗の理由書の抜粋 Sample 3 を示す。

### Sample 3(否定側を勝利とした理由書)

Vote は Opp です。理由は 2 つあります。

①少なくとも、Principle の話は Opposition. 特に否定側 2 人目の、全ての命が大切なときに優劣をつけてはいけない、が分かった一方、肯定側は "save more lives" が assertive であったのが残念でした。特に practical では確かに gov は money が減るが故に将来の犯罪が減るとしていたため、いわゆる功利主義(utilitarian)な principle がありそうだったが、少し遅いものの否定側 3 人目の bombing 等もあるとみると、この方法での saving more lives が失敗できるかが少し疑わしくなっていました。

② terrorism と kidnap の話があったと理解していますが、kidnap の場合 [1]払い続ける、[2]その場合愛する家族の self defense なのにかわいそう、という話は成立していると思いました(特に [1]がある以上……)

肯定側を勝ちとした 3 人目のジャッジは、理由書の抜粋 Sample 4 の通り否定側・議論②を不十分として退けた上で、肯定側の議論①が成立しているとみなし肯定側の優勢としていた。この点、Sample 1 と Sample 2 で見られた、一方の議論を他方の議論に関連して評価した記述は見られなかった。

### Sample 4(肯定側を勝利とした理由書)

(1) Is criminalization just

From gov we heard that when the consequences are too severe and the money (benefits) you give do lead to a larger harm. It is just to criminalize.

From opp we heard that unless it is an absolute bad it cannot be criminalized.

Although the question of what an absolute bad is was left through the round, I believe that both teams did not substantiate this point well, leading this clash (though it should have been the most important clash) to be a tie.

On the principle of the opp side of the gov abandoning their citizens, although lots of time was spent on it, there was no logic for it and why it only applied to current citizens and not future. Therefore, I don't believe in & of itself the argument stands.

最後に、理由書全体の3点目の特徴としては、判断した勝敗が同じであっても、ジャッジ間で説明において重視した内容が異なる点が挙げられる。相手チームからの反論への対応の出来を大きな判断理由と記述していた場合もあれば、政策導入後の変化の仕組みの説明を重要視していた場合など、結論は同じであっても説明で重視された点は個々のジャッジで異なっていた。

例を示すと、Sample 3 と Sample 5 は共に否定側を勝利としたジャッジの理由書であり、またメリット・デメリットに関する議論と原理・原則に関する議論は、独立して評価されていると読み取れる。その一方で、Sample 3 の理由書では原理・原則に関する議論についての記述が多くを占めているのに対し、他方 Sample 5 では、原理・原則に関する内容は、評価の観点③で簡単に言及されているにとどまっている。

### Sample 5(否定側を勝利とした理由書)

#### ① 今後、kidnap は減るか(テロリストはどうするか)

Aff は payment を criminalize することで kidnap の incentive が減ると分析。これに対し、Opp は、

1) 既に犯罪者・テロリストになってしまっている以上、やめる incentive はなく(やめたからといってテロリストでなくなるわけではない)、むしろ金策に困っているのになんとしても ransom を得るために radicalize すると、より丁寧に説明されていた。

2) 罰則をつけても、実効性がどの様に担保されるか分からないため、結果裏で ransom の支払いは続く可能性がある。

1)と合わせて kidnap はなくなる可能性は高い。また、後藤氏とフランス人パイロットの比較により、ransom の支払いが人質の解放につながると説明されていた。

⇒ 減らない。より radicalize するかもしれない。

#### ② Ransom を止めることは、テロとの戦いに explicit に必要か。

Aff は資金源を絶つことが重要と話していたが、①で書いたようにそもそも減らないことと、否定側3人目で言われていた alternative でも十分に function することが説明されていた。

⇒ これでないとテロとの戦いが遂行できないわけではない。

③ 今の hostage と将来の kidnap(の可能性)

Aff は特に説明がなかった一方、Opp は 1) 今 kidnap されていない人は、Government failure  
2) Tangible な今の人質の safety vs speculative な将来で比較し、今を優先すべきと言っていた。

#### 4.4 勝敗の理由書(2017年決勝 比較・価値論題)

2017年決勝での11枚の勝敗の理由書を、2018年決勝と同様に分析した。2017年の決勝では、“This House prefers a world without marriage (本院は結婚という制度のない世界をより好む)”という論題が用いられた。これは政策論題とは異なり、大まかには何らかの基準を示し「結婚制度のある世界」と「無い世界」を比較して論じることが期待される。表8は、肯定側と否定側の議論のうち、ジャッジの勝敗の理由書で言及されていた内容である。

前述の2018年の勝敗の理由書の分析では、1つ目の特徴として、勝敗を決める観点はジャッジ間でほぼ共有されていた点が挙げられた。大まかに「プラクティカルな議論」と原理・原則に関する議論を分けてジャッジは勝敗の判断を説明していた。対して、その様な区別をしていた理由書は、2017年の11枚では見受けられなかった。論題の種類が違い、議論内容も異なることから、当然ジャッジも内容の評価の枠組みを変えていたと言える。

表8：試合内の議論の概要(2017年決勝)

議論	内容
肯定側・議論①	結婚制度により、人生の選択肢が狭められている。離婚をすれば、社会的に差別を受けるため、関係を解消させることが難しい。
肯定側・議論②	離婚による社会的な制裁を避けるため、夫からのDV被害を受け続けざるを得ない人がある。
否定側・議論①	結婚制度により、パートナーと子どもへの責任が生じている。子育てに父親がより責任を持つようになっている。
否定側・議論②	結婚制度により、簡単に関係を解消できないため、相手と良好な関係を保とうというインセンティブが働く。
否定側・議論③	結婚しない、という選択肢も存在する。

表8で要約された内容に関して、11人のジャッジはそれぞれ「この内容は伝わった」「これは、相手に〜と反論されて弱められていた」と個々の主張を評価していた。否定側の議論である、「結婚制度によってパートナー間の責任意識がどう育まれるのか」については、全てのジャッジは説明不足を指摘し、高い評価を与えてはいなかった。

得票数が5対6という僅差になったこの試合では、ジャッジ間の判断の違いの原因の1つとして、論題の解釈の違いが挙げられる。理由書の記述からは、この試合を政策論題に関するものと解釈したか、それとも文字通り比較・価値に関する論題と見なしたかにおいて、ジャッジ間に違いが認められた。「結婚制度を無くすことでどのように現状の問題が解決するのか」を肯定側の立証すべき内容として求めていたジャッジと、あくまで結婚制度が有益か否かの説明の出来で勝敗を判断していたジャッ

ジに分かれており、前者は否定側に、後者は肯定側に票を投じていた。否定側に票を投じたジャッジは全員、政策で問題がいかに解決するかという点を理由書内で言及していた。

以下の Sample 6 と Sample 7 はそれぞれ肯定側を勝利としたジャッジ、否定側を勝ちとしたジャッジの勝敗の理由書からの抜粋である。

#### Sample 6(肯定側を勝利とした複数の理由書からの抜粋)

- ・“By the way, this is not a policy motion...”
- ・「Opp は、Contract によって Legal(civil)responsibility for partner が担保されると主張するが、①それが具体的にどのような責任で、②なぜそれが社会にとって重要なのか、は試合の最後まで十分に説明されていなかったの、そもそも Opp の case があまり説得力があるとは思えませんでした。Gov は PM が立てた 4 つのポイントをなんとか守り切ったので、case としては普通に理解できました」

#### Sample 7(否定側を勝利とした複数の理由書からの抜粋)

- ・「政策導入後の世界で、結婚がなくなれば問題が解決するのか」
- ・「結婚の廃止で、世の中がどう変わっていくのか分からない」
- ・「男女格差の解消は、なぜ uniquely にこのモーションによって達成されるのかは不明でした」

## 5. 考察

本研究の目的は、経験を積んだ即興型英語ディベートのジャッジが、どのように勝敗の判断を行っているのかその特徴を明らかにし、中学・高校の生徒が英語ディベートを聞く・審判を務める上での指導上の示唆を得ることにある。以下では、まず結果についてリサーチ・クエスチョンごとに考察を加える。

### 5.1 ジャッジ間で勝敗の判断・評価がどれだけ異なるのか

ジャッジが選手に与える個人得点は、75 を標準としたその数値自体ではバラツキが見られたものの、その試合に参加した選手間の順位に変換した場合、ジャッジ間である程度の一貫性が見られた。また、順位に変換した個人得点は、各ジャッジの勝敗の判断を一定の度合いで反映していることがうかがえた。これらの特徴は 2 つの論題の種類が異なる試合において、共通して見られた。

今回分析した勝敗の理由書において、全てのジャッジに共通していたことは、何か特定のエピソードや具体例を根拠として勝敗を判断してはいない点である。久保(2019)の研究では、即興型ディベートの場合、ジャッジ初心者は特定の事例・エピソードに判断を左右されがちであるという指摘があったが、予想される通り今回の上級者による 2 つの試合ではこの傾向は見られなかった。

### 5.2 ジャッジ間の判断の違いの原因は、勝敗の理由書からどう読み取れるか

勝敗の判断は、2018 年の政策論題の場合は、否定側チームの原理・原則に関する議論(principle argument)の評価によって左右されていた。また、政策導入による発生するメリット・デメリットに

関する議論と、原理・原則を踏まえた議論の両者の関係について解釈の相違が見られた。一方が他方に従属するものとして評価したジャッジと、両者を分けて個別に評価したジャッジがあり、これが勝敗の判断をある程度左右していたと考えられる。

2017年の試合結果では、ジャッジ間において、試合の立証責任として何を求めていたのか違いが認められた。「これは政策論題の試合ではありません」と明確に記述するなど、比較・価値の認定に関する試合として評価している理由書の存在に対して、試合の議論の方向性を踏まえ、政策論題として評価した理由書があり、この点が勝敗の判断に影響したと考えられる。

### 5.3 指導上の示唆

#### (1) 個人得点のつけ方に関して

現状のほとんどの高校生そして大学生の大会では 75 を基準とした得点を個々に与えているが、経験を積んだジャッジ間においても、同一の選手に与える点数には大きな幅が生じうると示された。

このことから、中高の授業内で生徒にジャッジ役を務めさせる場合の示唆として、より簡易な評価方法の導入が考えられる。ジャッジ役の生徒には、選手の個人得点をつけさせるのではなく、例えば試合での貢献に応じて選手の順位を決めさせる、または「ベストスピーカー」を選ばせることが現実的ではないかと言える。国内の一部の大会ではジャッジ間の得点の差異を抑えるために、細かい評価項目それぞれで採点し、最後に各スコアを合算する分析的評価(analytic rating)が用いられているが、現職の英語教員にとってさえも、採点の負担が指摘されていた<sup>2</sup>。この点、試合での貢献度による選手の順位付けは、より授業内で取り入れやすい評価方法となり得る。

#### (2) 試合で用いる論題について

本研究で扱った試合の事例からも、まずは事実として経験を積んだジャッジ間でも、勝敗の判断が異なり得ると確認された。政策論題の試合においては、個々の議論の評価において違いが見られると同時に、異なる種類の議論間での関係の解釈において違いが生じる可能性が示された。また、価値・比較に関する論題を扱った 2017 年の決勝の理由書では、立証責任として何を求めたかにおいて、ジャッジの理由書の内容に違いを見つけることが出来た。

以上のことから、実践上の示唆としては、授業内で生徒にジャッジ役を務めさせる場合、以上の解釈の違いで起こり得る混乱を防ぐ事前指導が好ましいと言える。例えば初心者 of 生徒の指導においては、具体的な議論が中心となる政策論題を選び、原理・原則に関する内容が最低限の話で済むよう配慮することも 1 つの方法と言える。原理・原則的な議論が必要となる論題に関しては、教員が段階的に知識を導入し、特定の論題において明示的に用いるよう指導することが考えられる。

また、2017 年決勝の理由書でのジャッジ間の論題解釈の差異を踏まえれば、論題の種類の違いに応

---

<sup>2</sup> 一例として、日本高校生パラメンタリーディベート連盟(HPDU)が開催している「新緑杯」という大会では、高校のスピーキング・テストの評価方法を踏まえた分析的評価が第 1 回大会より用いられていたが、採点方法が煩雑であるというジャッジ参加者の指摘を受け、2020 年大会よりは各試合での貢献度を順位として選手に与える評価方法が採用されている。この順位による個人得点付与の問題点として、同一チーム内に能力の高い選手が複数いた場合、チーム内で順位を取り合う結果となり、全体の個人成績順位に結果が表れにくいという指摘もあり、今後の検討事項となっている。

じて、どの様な立証責任が生じるのか、生徒に明示的に指導を行っても良いのではと考えられる。一般的なディベートの論題としては、政策論題がその代表と言える。それ故に、政策論題以外の試合では何が期待されるのか教員が指導することが好ましいと言える。

### (3) 即興型と準備型のジャッジの違いについて

本研究で調査した2つの試合で主審判を務めた者に対して、理由書の分析内容の妥当性の確認と同時に、調査の補足としてインタビューを行った。その中で、即興型と準備型のジャッジの違いに関して、以下のような言及があった。

ただ調査型のジャッジと即興型のジャッジが一番異なると私が個人的に感じているのが、「争点ベース」のジャッジをするかどうかです。準備型のジャッジではロジックのフローとエビデンスを追って行って、各アーギュメントの立ち具合・残り具合を検証し、「発生可能性」や「インパクト」（質的・量的）でメリット・デメリットどちらが上回ったのかを判断して、勝敗を決めると思います。

それに対して、即興型ではレベルが高くなってくると、多くのジャッジが争点・クラッシュポイントベースで判断すると思われます。例えば、「既存の人質は助かるのか?」「将来的な犯罪は減るのかどうか?」「政府が優先するのは現在危険にさらされている人の命か、将来の被害者の減少か?」「何が犯罪の構成要件なのか?身代金の支払いは該当するのか?」など基本的に各チームが一番説明と時間を費やした争点がメインのクラッシュとされ、それを「どちらが取ったか」で勝敗を決める傾向があると思われます。

高校生レベルの大会で審査員がどう勝敗を出したのかは覚えていないのですが、「そもそもジャッジのフレームワークが準備型と即興型では大きく異なる可能性がある」ということは前提として念頭においてもいい気がしました。もちろん例外も存在して、即興型の試合でも準備型の様なジャッジをすることもありますし、準備型でも最終弁論を大きく評価するジャッジはいます。

上記のインタビュー内容から示唆されるように、準備型と即興型のジャッジには重なる点もあれば、異なる点もある。両者あるいは一方のみを経験する高校生が、ディベートの勝敗の判断についてどのような認識を持つに至るのか、今後の研究課題となり得るだろう。

## 5.4 本研究の限界と今後の研究

本研究の限界としては、まずジャッジの評価・勝敗の判断の差において、研究対象となるジャッジの属性について考慮をしていない点が挙げられる。高校生全国大会に招待され、決勝のジャッジを務める者は一定以上の経験を積んでいると見なし、その経験年数、国際大会の経験、即興型英語ディベート以外のディベート経験の違いについて、背景の調査を行ってはいない。また、勝敗の理由書を踏まえて事後のインタビューを行うなど、分析のさらなる裏付けが望まれる。

さらには、本調査では事例研究として異なる種類の論題が使われた2試合を比較したが、当然同種の論題を用いて、今回示されたジャッジの評価・判断の差の特徴が見られるか検証することが望まれ

る。同時に、個々の議論の評価自・反論内容の評価がどう異なるのかより詳細な分析が必要である。

今後の研究の可能性としては、ディベート経験等についての属性を確認し、分類したジャッジ群に対して、別々に同じ試合の動画を見せ、勝敗の理由書を記入してもらい、その判断について事後の聞き取りを行う調査が考えられる。これにより、生徒にジャッジ役を務めさせる上で留意すべき事項がさらに明らかになると期待される。

また審判教育の研究としては、同一の試合を英語ディベート初級者、中級者、そして上級者に見せどのように評価の観点・内容が異なるか比較し、ジャッジ役としての熟達の過程を調査することも考えられる。特に久保(2019)で指摘のあった、魅力的な具体例に勝敗の判断の根拠を委ねる傾向がどう変化するか調査に値すると考えられる。

## 6. 結論

本研究は、即興型英語ディベートにおいて、経験を積んだジャッジ間での判断の違いとその原因を探った。2つの高校生全国大会決勝において、各ジャッジが選手に与えた個人得点と勝敗の理由書を分析対象とした。結果、個人得点をその試合での選手間の順位ととらえることの有用性が示されるとともに、性質の異なる議論間の関係の捉え方と、論題の種類から期待される議論内容の解釈の違いが勝敗の判断の違いを生んでいる可能性が示された。中学・高校生へのジャッジ指導においては、個人得点ではなく選手の順位を決めさせること、試合で扱う論題を教員がその特性に応じて選択し段階的に指導することの有用性が示唆された。

## 謝辞

本研究の調査実施においては、一般社団法人日本高校生パラメンタリーディベート連盟 (HPDU of Japan)、および第8回そして第9回 HPDU 連盟杯全国大会にてジャッジを務められた方々より多大なるご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。そして、本稿の完成にあたり、より適切な調査計画のあり方や、日本の英語ディベート指導における本研究の位置づけと意義等についてご助言をくださいました査読委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。

## 引用文献

- Corbit, K. (2017). *A Theory-centered Model of Debate Assessment: The Rhetorical Judging Paradigm*. (Doctoral Dissertation, University of Alabama)
- English Speaking Union of Japan. (2017). *ESUJ Debate Handbook 2017*. Retrieved from [https://www.esuj.gr.jp/\\_files/debate/Debate2017/ESUJ2017\\_handbook\\_finalised.pdf](https://www.esuj.gr.jp/_files/debate/Debate2017/ESUJ2017_handbook_finalised.pdf) (2021年8月30日)
- Hansen, J. (2007). Teaching Debate in Japan: A Review of Resources and Materials to Meet the Demands of Teaching Japanese English Learners. *Bulletin of Osaka Jogakuin 2 year College*, 37, 67-78.
- Inoue, N. (1994). *Ways of Debating in Japan: Academic Debate in English Speaking Societies*. (Doctoral Dissertation, University of Hawaii, 1994).

- Inoue, N. & Nakano, M. (2006). The costs and benefits of participating in competitive debate activities: Differences between Japanese and American college students. In F. H. van Emerson, M. D. Hazen, P. Houtlosser & D.C. Williams (Eds.). *Contemporary Perspectives on Argumentation: Views from the Venice Argumentation Conference* (pp.167-181). Amsterdam: Sic Sat.
- 有嶋 宏一 (2010). 「高校生の英語ディベート活動は英語スピーキング力と批判的思考力を伸ばすのか」『STEP Bulletin』 22, 115-117.
- 井上 奈良彦 (2011). 「ディベート入門」 Retrieved from <http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/intro-debate-inoue2.pdf> (2021年7月9日)
- 加藤 彰 (2020). 『即興型ディベートの教科書 東大で培った“瞬時に考えて伝えるテクニック”』東京: あさ出版
- 久保 健治 (2019). 「議論教育における調査型と即興型の比較に関する一考察 —日本語教室ディベートにおける実践とアンケートの分析—」『ディベートと議論教育 — ディベート教育国際研究会論集』 2, 2-18.
- 久保 裕視 (2009). 『高校教師のための英語ディベート授業入門(基礎編)』東京: アルク出版
- 小林 良裕 (2019). 『英語ディベート 高校授業用テキスト(教員用): A New Introduction to Debating in English Book 3』埼玉: S.A.D.ワークス
- 小林 良裕 (2020). 「高校での英語ディベート指導: 10年間の総括」『英語教育』 68(12), 36+.
- 小林 良裕 (2021). 『授業・部活で楽しむ即興型ディベート[日本語] A New Introduction to Debating in English Book 5』 埼玉: S.A.D.ワークス
- 高畑 伸子・清水 真澄 (2017). 「高校1年生を対象とした初めての英語ディベート指導実践—より効果的な指導法の気づきと生徒の変容に焦点をあてて—」『中部地区英語教育学会紀要』 46, 193-200.
- 中川 智皓・山内 克哉・新谷 篤彦 (2019). 「パラメンタリーディベート (即興型英語ディベート) における議論の整理と評価の一考察」『システム制御情報学会論文誌』 32(12), 446-454.
- 中野 美香 (2007). 「実践共同体における大学生の議論スキル獲得過程」『認知科学』 14(3), 398-408.
- 飛騨学園高山西高校 (2007). 『高校生英語ディベート授業論 ティーチーズマニュアル』
- 松本 茂 (2009). 「授業ディベート編」松本 茂・鈴木 健・青沼 智 (編) 『英語ディベート 理論と実践』, 5-74. 東京: 玉川大学出版部
- 宮城県立都城西高等学校 (2008). 『平成 17~18 年度 Super English Language High School 英語ディベート指導マニュアル』